

『声聞地』の不浄観

——光明想を再考する——

阿 部 貴 子

はじめに

『瑜伽師地論』「声聞地」（以下『声聞地』）の不浄観に関してすでにいくつかの論考があるが（釈2004; Kritzer 2017）、不浄観のプロセスで光明想（*ālokaśamjñā*）を行う点についてはほとんど言及されていない。光明想は初期経典より昏沈睡眠蓋を除くものとされ、修行者が一般的に行う瞑想であったと思われる。『声聞地』においても、光明の相を取り（*ālokanimittam ud-√grh*）心に保つことを光明想と称し、多くの箇所では説示する。「第一瑜伽処」では覚醒のヨーガ（*jāgārikāyoga*）（Abe 2004）、「第二瑜伽処」では十想の一（権2014）、「第四瑜伽処」では天眼を得る方法として挙げている。また『瑜伽師地論』においても『三摩呬多地』で様々な光明の禅定を紹介し、『修所成地』では法光明を光明想と定める（菅原2010）。これらの箇所は各々に研究されているが、概して具体的な説明を欠くか阿含経典の解説にとどまる。しかし不浄観における光明想は——結論から述べれば——『声聞地』に特有の方法であり、後の唯識論書（『解深密経』『大乘莊嚴経論』）で説かれる止観によって得る法光明と密接に関わっていると考える。そこで本稿では、まず不浄観における光明想の方法と意義を考察し、他経論の影響を確認するためその所説との関連を論じたい。

1. 光明想の方法と意義

『声聞地』において不浄観は、「第二瑜伽処」の所縁章、「第三瑜伽処」の心一境性章、「第三瑜伽処」の修作意章で説明される。このうち「第三瑜伽処」の修作意章では、不浄観における止（*śamatha*）と観（*vipaśyanā*）の修行を説く。

ここで瑜伽行者は、不浄観の前にまず世俗を遠離する相（厭離相）、自らの戒の相（欣樂相）、色相・尋伺・随煩惱の相（過患相）を取ったのち、光明の相（光明相）—灯明・火の明かり・日輪・月輪の相—を取る。その後墓地の相、または

絵・木・石・泥によって描かれた不浄の相（了別相）を取り観察する（ŚrBh III, 126-127）。

だが墓地から臥坐処等に戻ったのち、ただちに死体を想起するのではなく、まず止を行じて心は無相（nirnimitta）・無分別（nirvikalpa）・寂靜（upaśama）にしてから、観として有分別の瞑想対象（ālabana, 以下所縁）を取る。対象とすべき身体観察36種と死体観察10種の説明はこの箇所では省略されている。そして、次のように不浄観を行うという。

①まず不浄（死体ないし骨鎖）を一度に観察するのではなく、止とともに繰り返す。その所縁に心が喜び明瞭となり、力づくで心を向けられないなら観を続ける。②逆に観が力づくで行われるようになったら、止によって心を寂靜にする。このとき心にある不浄の相を消去し（vibhāvayati）、現前させないが（anābhāsaḡatāyām sthāpayati）、完全に除去するのではなくそれを所縁として無相・無分別に心を安定させる。③以前に取った光明の相（ālokanimitta）を作意することにより、光明を伴い、光輝を伴い、明瞭で、暗闇のない心となり、さらに止観を修習する。④この光明想により、所縁におけるより鮮明で広大な顕れを持つ状態（pracurābhāsātā）となる。（ŚrBh III, 136-139）

以上、光明想の意義は、第一に不浄観の前に心明るくさせておくことである。第二に、止観によって所縁に心を安住させ、光明想によってその鮮明な顕現を得ることである。

この後、当箇所では、所縁を捨てずに（anutsr̥ṣṭenālabanena）坐り、止観において取った通りの相を（yathodgr̥hītena nimittena）永続的なものにして（pratatakāritayā）ヨーガを行うと説く（ŚrBh III, 148-149）。そして、慈愍観・縁性縁起観・界分別観・入出息念を行じ、身心の軽安と心一境性を得て、色界の禪定に入るという。ただし、不浄観以外のこれらの修行において光明想は説かれておらず、光明想は不浄観とのセットで考えられていたと思われる¹⁾。なお「第二瑜伽処」では、外部から取り心のなかでイメージした相を、知られるべき事物と同分の影像（jñeyavastusabhāga-pratibimba）、または事物と似た（anusadr̥śa）顕現（pratibhāsa）と定義し、止観によって影像を超えた智見を得ると述べ（ŚrBh II, 42-49）、『解深密経』へと理論的に展開する説を提示する。上で論じた「第三瑜伽処」の光明想は、より実践的な方法として、この思想に結びついているといえる。

2. 他の経論との関連

『中阿含経』『念処経』ではこの光明想に先行する説があるのだろうか。明確な典拠は見受けられないが、多くの関連する教説がある。

まず、不浄観の前行に関しては、漢訳『中阿含経』『念処経』（T26 98）に注目すべきである。一般に不浄観の典拠は『念処経』（*Satipaṭṭhānasutta*, MN. 10）『大念処経』（*Mahāsātipaṭṭhānasutta*, DN. 22）に求められる。ここでは身念処として、入出息念、行住坐臥の観察、生活行動の観察、身体の不浄、四大、死体の観察が順次説かれるが、このなかに光明想は見られない。

しかし『中阿含経』『念処経』には、行住坐臥の観察、生活行動の観察、入出息念、身体の清浄、身体の不浄、六界、死体の観察が説かれており、*Satipaṭṭhānasutta* には無い身体の清浄の項がある。ここでは、まず身体に離生喜樂が満ち、次に喜樂により身体が潤い、さらに喜無く樂が生じると見て、最後に光明想をもって上下・昼夜・前後の平等を観察し、心の暗闇を除くとある（583a22-26）²⁾。

ちなみに『声聞地』の不浄観は「第二瑜伽処」に説かれる身体観察と死体観察が根幹となる。死体観察について経典を引用するが、それは *Satipaṭṭhānasutta* ではなく『中阿含経』『念処経』と一致し、サンスクリット断片とも相応する（ŚrBh II 66-67; Karashima et al. (2015, 315)）。したがって光明想についても、本経と無関係ではないだろう。

『法蘊足論』止観と光明想の関係については、『法蘊足論』に見られる。ここでは不浄観のプロセスに光明想を説かないが、「四修定」の項で四静慮を解説し光明想を示す。すなわち、瑜伽行者は①初静慮で喜樂を得て止と心一境性を得る。②第二静慮では、浄月輪・浄日輪・薬物・末尼・諸天宮殿・星宿を取って観じ（思惟・解了・観察・勝解・堅住）、散乱すれば心を止め（住・等住・近住・安住・一趣・等持・無二・無退）³⁾、光明の相を観察しつつ止と観を繰り返す。なお外部の相を捉える禅定は光明定であるが、以下のように、それを思惟することを光明想と定義する。

云何が名づけて光明定想と為す。謂く、即ち前の光明定に依止して、前の如き諸の光明の相を思惟し、諸の想・等想・解了・取像・已想・当想するを光明定の想と名づけ、此の光明定想を光明想と名づく。（490b2-5）

そして③第四静慮では清浄・捨念を得ると説示する。以上、第二静慮の所説は止観と光明想とを共に示す例として重要である。『声聞地』と『法蘊足論』は、不浄の相を内外で捉える点でも共通しており⁴⁾、この箇所も両者の近似性を表している。

『婆沙論』『俱舍論』『婆沙論』も不浄観を説く箇所（第四十巻）で光明想に言及しない。だが、Kritzer (2017, 53-54) が指摘するように「八解脱」の項（第四十八巻）で不浄観と浄観を説く。ここでは八解脱のうち、四静慮に相応する初三解脱を説明し、①初解脱「色有って諸色を観ずる解脱」では不浄相を、②第二解脱「内に色想無く外に色を観ずる解脱」では自らの内の想を離れて不浄相を取することを示す。そして、③第三解脱「浄解脱」では、不浄相によって心が沈没するため、妙なる園林・流泉・池沼などの浄相を取り心を悦ばせると説く（436b14-20）。これらの説明は『俱舍論』「分別定品」でも同様である（AKBh 454, 24-455, 14）⁵⁾。

なお『三摩呬多地』は、①初解脱で光明の顕現の相（*ālokābhāsanimitta*）を取り、②第二解脱で外の諸色を取り、③第三解脱に浄解脱として捨念・浄化・純白（*upekṣāsmṛteḥ pariśuddhāyāḥ paryavadātāyāḥ*）を得ると説く（SaBh 180-181; 336b15-c7）。初三解脱に明確な定義は設けられていないが、禪定において不浄観から浄観へという方向性のあったことが伺える。

『達磨多羅禪經』『坐禪三昧經』禪經典では、興味深いことに不浄観の項で初三解脱を説き、そこに白骨の光明を挙げている⁶⁾。『達磨多羅禪經』「不浄観升進品」⁷⁾では死体観察に三段階があるという。①第一に不浄観を行い、②第二に浄解方便相として白骨からの流光が宝樹になると観察し（白骨流光出。從是次第起青色妙寶樹）、③第三の浄解脱では自らの身体より光が放たれるという（三昧然慧燈。從彼一身出高廣普周遍）（316b26-c11）。またそれを観想、明想、空想と換言している。

『坐禪三昧經』「第一治貪欲法門」においても不浄観を行った瑜伽行者には三種があるという。①初静慮では、身体が喜び柔軟で軽くなり、白骨から白瑪瑙のような流光があると観察する（白骨流光猶如白珂）。②次の骨観では、白骨の光明が白く遍満すると観ずる（白骨相中光明遍照淨白色）。③最後の浄観では、心一境に住して、死体の肉を除き骨を観ずるといふ（272a20-27）。

表現は異なるが『俱舍論』「賢聖品」にも僅かに言及がある。そこでは禪經典に典拠がある瑜伽師の三種—初心者・熟練者・超作意者—を説明し、初心者は骨

の浄化を観ずる (asthiviśodhayan) と記す (AKBh 338, 5-9).

以上、不浄観における光明想を明確に説く経論は見られず、光明想が『声聞地』特有の方法であることが分かる。しかしすでに指摘されるように『声聞地』には阿毘達磨論書と禅經典に共通する多くの箇所があり、それを考慮すれば『声聞地』の作者は、不浄観と光明を結びつける方法を知っていたと思われる。

『三摩呬多地』『修所成地』『瑜伽論』の他章に『声聞地』の影響は見られるだろうか。『三摩呬多地』は様々な禅定の解説——昏沈睡眠蓋・疑蓋の対治、所縁の外相・光明相・拳相、八解脱、大三摩地、一分修具分修、四修定——において光明に言及するが、不浄観と関連する記述は無い。ただし『声聞地』に説明の無い法光明 (dharmāloka) のタームが新たに現れている。ここでは光明に三種——暗闇を対治するもの、法光明、身体の光明——があると述べ、法光明については、取った通り、思惟した通り、触れた通りの諸々の法を観察することと定義する。(SaBh 139, 12-17; 330a25-b2)

『修所成地』でも不浄観を説いていないが、ここでは『三摩呬多地』に説かれる法光明を光明想と定め、明確に止観と結びつけている。以下の通りである。

光明想には様々な光明を所縁とするもの (anekavidhālokālambanā) がある。すなわち『三摩呬多地』にある通りである。しかし、ここでの意味は、法光明を所縁とするもの (dharmālokālambanā) が、光明想として意図されている。そのうち、聞き、受け、学んだ通りのことについて、諸々の法の失念の無いことが (smṛtyasaṃpramoṣo dharmāṇām), 法光明といわれる。それに伴い、それと相応した想が光明 (想) と知るべきである。それはなぜか。なぜなら、止分を行じている者、あるいは観分を行じている者にとって、法に関することの失念がある (dharmānvayaḥ smṛtiśaṃmoṣaḥ), それが心の究極の暗闇だからである。(MS 143a5-144b1)⁸⁾

すなわち、法とは聞き受持し学んだ事がらで、光明とは失念の無いことつまりその記憶であり、光明想とはその記憶を対象とすることである⁹⁾。ここで、光明想は端的に止観における法光明の想と纏められている。

まとめ

不浄観における光明想の意義は、第一に不浄観の前に心を明るくすることである。第二に、止観によって所縁に心を安住させ、光明想によってその鮮明な顕現を得ることである。また、取った通りの相を永続的に保つための方法といえる。

このうち不浄観の前行としての光明想は『中阿含経』『念处経』に説かれ、止観に伴う方法は『法蘊足論』にも見られた。だが不浄観における光明想については『声聞地』に特徴的なものである。阿毘達磨論書の浄解脱、禅經典の白骨観を意識していた可能性もあるが、『声聞地』はそれらとは異なり不浄観と止観のプロセスの一つに光明想を位置づけている。また不浄観の光明想は『三摩呬多地』『修所成地』にも説かれておらず、『瑜伽論』全体への影響は無いと考えられる。ただし『修所成地』で法光明を止観による法の記憶と表現する点からは、止観による所縁の顕現という『声聞地』の影響が僅かに認められる。

なお『解深密経』は、止観によって法光明を保ち無分別なる相の顕現を得るといふ。『大乘莊嚴経論』は、止観によって法光明の増長があり唯心を獲得するとして四善根位を説明する。『声聞地』で説かれた光明想なる方法は、後に不浄観を離れ止観との関連で重視され、止観における顕現を示す概念と結びついていったのだろう。唯識論書の修行論への展開に関して、不浄観の光明想は極めて重要な意味を持つといえよう。

- 1) 『摂決択分』『声聞地』でも善く相を取ることと不浄観の拠り所は光明想であると説かれる (686b13-21)。
- 2) 「第二瑜伽処」にも *saṃjñā* の修習として、同様の光明想が示される (ŚrBh II, 172-175)。
- 3) 『法蘊足論』の止観に対する表現は、『声聞地』における観の五種 *vipaśyati, vicinoti, pravicinoti, parivartakayati, parimimānsām āpadyate* と、止の九種 *sthāpayati, saṃsthāpayati, avasthāpayati, upasthāpayati, damayati, śamayati, vyupaśamayati, ekotikaroti, samādhatte* に極めて近い (ŚrBh II, 42-45)。
- 4) 『法蘊足論』が不浄観を観として詳述する点は『声聞地』に通じる。また『声聞地』は不浄を内（自身）と外（死体）で捉え、『法蘊足論』は不浄を自身の内外で捉えるが、いずれも『婆沙論』『俱舍論』に記述は無い。Cf. Kritzer (2017, 36-39)。
- 5) 「第二瑜伽処」補特伽羅の項にも『俱舍論』と同じ初三解脱の名称を挙げるが、浄相や光明についての言及は無い (ŚrBh II, 36-39)。
- 6) 『大智度論』でも白骨観を説く。Dhammajoti (2009, 280); Greene (2012, 58, n. 188)。『大般涅槃経』(675b10ff.) では菩薩の修行として不浄観・白骨観からの念仏を説く。
- 7) Greene (2012, 53-63) も『達磨多羅禅経』『坐禅三昧経』の浄解脱に言及する。
- 8) Tucci 写本に基づく。なお和訳は菅原 (2010, 164-165) とチベット訳は権 (2003, 262-263) を参考にした。校訂テキストは菅原氏が準備されているものを待ちたい。
- 9) 十想については「第二瑜伽処」に同じ項目がある。光明に法光明・義光明・止光明・観光明があるとし、ここでの光明想は法の思惟と瑜伽作意を指すと簡単に示す。(ŚrBh II, 140-141)。十想の形成については権2003参照。
- 10) 菅原 (2010, 296); 佐久間 (2014, 304)。

〈略号〉

MS Giuseppe Tucci による写真。Oriental Department of Library of the Istituto Italiano per

- l’Africa e l’Oriente in Rome (SFERRA 2009: 41) 所蔵。
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan. Patna: K. P. Jayaswal, 1967.
- ŚrBh II 『瑜伽論声聞地 第二瑜伽処——サンスクリット語テキストと和訳——』大正大学総合佛教研究所声聞地研究会, 山喜房仏書林, 2007.
- ŚrBh III 『瑜伽論声聞地 第三瑜伽処——サンスクリット語テキストと和訳——』大正大学総合佛教研究所声聞地研究会, 山喜房仏書林, 2018.
- SaBh *Samāhitā bhūmiḥ: das Kapitel über die meditative Versenkung im Grundteil der Yogācāra-bhūmi*. ed. Martin Delhey. 2 vols. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, 73 1, 2. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, 2009.

〈参考文献〉

- Abe Takako. 2004. “Practice of Wakefulness: *Ālokaśamjñā* in the *Śrāvakabhūmi*.” 『印度学仏教学研究』53(1): 478–480.
- Greene, Eric. 2012. “Meditation, Repentance, and Visionary Experience in Early Medieval Chinese Buddhism.” PhD diss., University of California, Berkeley.
http://digitalassets.lib.berkeley.edu/etd/ucb/text/Greene_berkeley_0028E_12517.pdf
- Karashima Seishi, Nagashima Jundo and Wille, Klaus. 2015. *The British Library Sanskrit Fragments*. Volume III.1. The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University. Tokyo: Meiwa Printing Company.
- KL., Dhammajoti. 2009. “The *aśubhā* Meditation in the Sarvāstivāda.” In *Journal of the Centre for Buddhist Studies* (Sri Lanka), vol. 7, 248–295. Hong Kong: Centre for Buddhist Studies, Sri Lanka and The Buddha-Dharma Centre of Hong Kong.
- Kritzer, Robert. 2017. “*Aśubhabhāvanā* in *Vibhāṣā* and *Śrāvakabhūmi*.” In *Śrāvakabhūmi and Buddhist Manuscripts*, ed. Seongcheol Kim and Jundo Nagashima, 27–60. Tokyo: Nombre.
- Schmithausen, Lambert. 1987. “Beiträge zur Schulzugehörigkeit und Textgeschichte kanonischer und postkanonischer buddhistischer Materialien.” In *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hinayāna-Literatur*, Teil 2, ed. Heinz Bechert, 304–403. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- . 2007. “Aspects of Spiritual Practice in Early Yogācāra.” 『国際仏教学大学院大学研究紀要』11: 67–213.
- 権来順 2003 「古代インド仏教における観想法——『瑜伽師地論』修所成地に説かれる十想とその背景に関する研究——」博士論文, 東北大学。
- 2014 「『瑜伽師地論』修所成地における十想観法」『日本仏教学会年報』79: 67–93.
- 佐久間秀範 2014 「セッション No. 2 に対するコメント」『日本仏教学会年報』79: 303–311.
- 菅原泰典 2010 『修所成地の研究』私家版。
- 釈患敏 1994 『『声聞地』における所縁の研究』山喜房仏書林。

〈キーワード〉 *ālokaśamjñā*, 止観, 不浄観, 浄観, 白骨観, 法光明

(大正大学任期付准教授)